

■各館開催概要

第1会場：ポーラ美術館

会期：2019年3月23日(土)～7月28日(日)(会期中無休)

住所：神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285

TEL：0460-84-2111

開館時間：9:00～17:00(最終入館は16:30)

主催：公益財団法人ポーラ美術振興財団ポーラ美術館、公益財団法人ひろしま美術館

入館料：大人1,800円(1,500円)/シニア1,600円(1,500円)/大学・高校生1,300円(1,100円)
中・小学生700円(500円)

*()内は15名以上の団体料金

*いずれも消費税込

*中・小学生は土曜日無料

第2会場：ひろしま美術館

会期：2019年8月10日(土)～10月27日(日)(会期中無休)

住所：広島市中区基町3-2(中央公園内)

TEL：082-223-2530

開館時間：9:00～17:00(金曜日は19:00まで/最終入館は閉館の30分前まで)

主催：公益財団法人ひろしま美術館、公益財団法人ポーラ美術振興財団ポーラ美術館、
中国放送、中国新聞社

入館料：一般1,300円(1,100円)/大学・高校生1,000円(800円)/中・小学生600円(400円)

*()内は、前売りまたは20名以上の団体料金

*65歳以上の方は一般団体料金(1,100円)となります。年齢確認のできるものを受付にご提示ください。

*障がい者手帳をご提示の方はご本人と同伴者1名が無料になります。

■出品点数 74点

■出品作家

ジャン=バティスト=カミーユ・コロー、ウジェーヌ・ドラクロワ、カミーユ・ピサロ、クロード・モネ、ピエール・オーギュスト・ルノワール、
アルフレッド・シスレー、ポール・セザンヌ、アンリ・マ蒂斯、パブロ・ピカソなど

■イベント

クロスギャラリートーク「ポーラ美術館vsひろしま美術館 それぞれのコレクションの魅力を語る」

日時：2019年3月30日(土) 14:00～15:00

先着30名(要当日入館券)

講師：古谷可由(ひろしま美術館学芸部長) 岩崎余帆子(ポーラ美術館学芸課長)

スペシャルギャラリートーク「光学調査からみたゴッホ ポーラ美術館収蔵作品を中心に」

日時：2019年6月15日(土) 14:00～15:00

先着30名(要当日入館券)

講師：田口かおり(修復家・東海大学創造科学技術研究機構特任講師)

■報道に関するお問合せ

ポーラ美術館広報事務局 プラップジャパン 担当：屋木、名取

TEL: 03-4570-3172 / FAX: 03-4580-9128 MAIL: polamuseum.pr@prap.co.jp

住所：〒107-6033 東京都港区赤坂1-12-32 アーク森ビル33F 私書箱562号

ポーラ美術館 広報担当：中西、藤田

TEL: 0460-84-2111 / FAX: 0460-84-3108

住所：〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285

Press Release ポーラ美術館×ひろしま美術館 共同企画

【報道関係者各位】

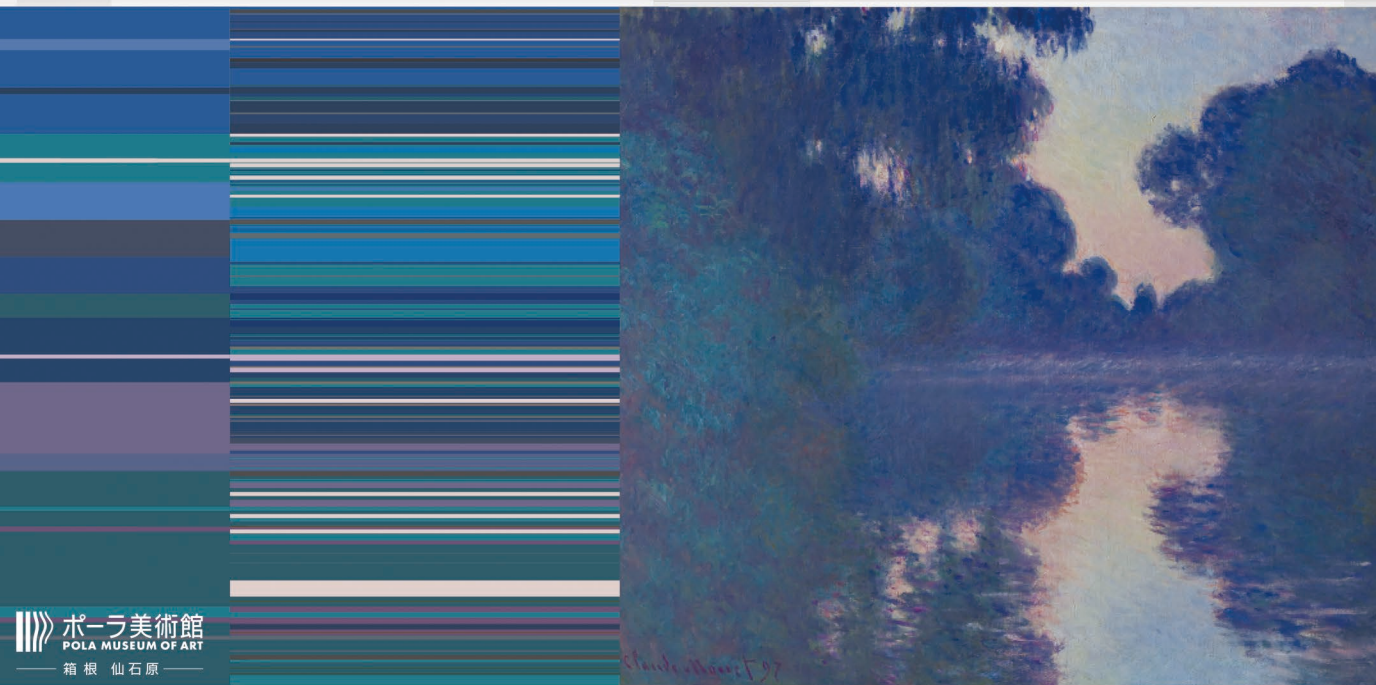
2018年12月

印象派、記憶への旅



モネ、ゴッホ、マ蒂斯、ピカソ…。日本の二大印象派コレクション、
夢のコラボレーション！

2019 3/23 sat 7/28 sun Impressionism — Light and Memory



ポーラ美術館
POLA MUSEUM OF ART
箱根 仙石原



フィンセント・ファン・ゴッホ《ヴィゲラ運河にかかるグレース橋》1888年 ポーラ美術館蔵



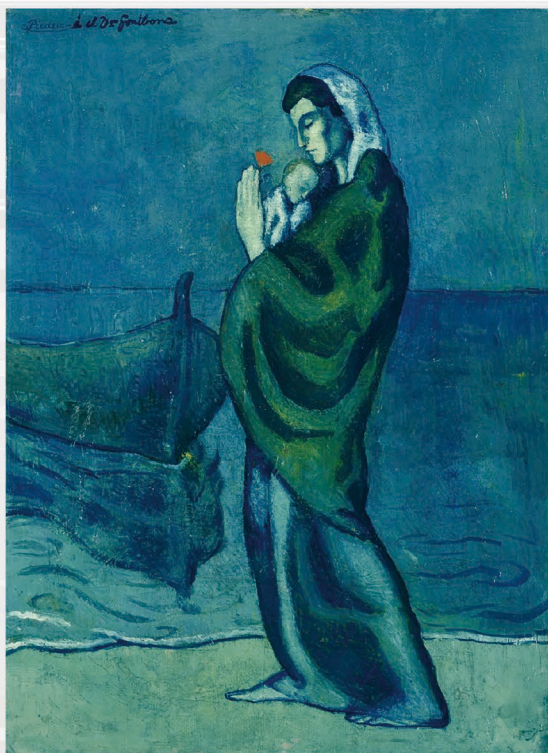
クロード・モネ《セーヌ河の朝》 1897年 ひろしま美術館蔵

ポーラ美術館とひろしま美術館のコレクションは、それぞれ西洋の近代美術の展開をたどるうえで重要な画家の重要な作品を収集しています。質、量ともに充実した両館のコレクションには、とくに印象派絵画に優れた作品が多く、戦後に形成されたフランス近代美術のコレクションとして国内外で高い評価を得てきました。

19世紀のフランスでは、外交や政治、思想や精神性、科学や技術の発達による交通手段の発展から世界がひろがり、画家たちが描く世界もひろがりました。画家たちは、旅で出会った風景や人々の姿を、ときには記録として、ときには記憶に基づいて描いています。

本展覧会は、両館のフランス印象派の風景画を中心に、ドラクロワやコローからピカソ、マティスまで74点の名品を選び、19世紀の画家たちの旅と記憶、都市や水辺の風景に向けられた画家たちの視線、風景の印象や移ろいゆく光の変化が留められたかたちや色彩の表現を探ります。また、最後のセクションでは、絵画に留められた画家の制作過程や技法の痕跡＝記憶を、文献調査や最新の光学調査によって呼びまし、作品の新たな魅力としてご紹介いたします。

「日本の二大印象派コレクション 夢のコラボレーション」 ポーラ美術館×ひろしま美術館



パブロ・ピカソ《海辺の母子像》1902年 ポーラ美術館蔵



パブロ・ピカソ《酒場の二人の女》1902年 ひろしま美術館蔵
©2018 - Succession Pablo Picasso - BCF(JAPAN)

み 日本の二大印象派コレクションが集う夢のコラボレーション！
東のポーラ美術館、西のひろしま美術館の作品を一挙公開。

印象派の作品には日本美術の影響も指摘されており、日本でもその作品は多くの人々に親しまれています。本展では、国内の印象派コレクションとして東西を代表する両館の作品を一堂にご覧いただけます。

ど まさに本物の作品で見る美術の教科書。
モネ、ゴッホ、マティス、ピカソの珠玉のコレクションを展覧！

両館のコレクションには、同一の画家の同時期や、同じモチーフの作品が多くあることも特徴です。これらを比較することで近代美術の巨匠たちの画業の展開がよりはっきりとわかります。

こ レクションをもつ美術館だからこそできる。科学調査や文献調査など
最新の作品調査によってゴッホ、マティスの制作過程の秘密に迫る。

ろ ゴッホ作品の科学調査、ゴッホが弟テオに宛てて書いた手紙の調査や、マティス自身が撮影した制作過程の記録写真と作品調査によって、今まで知られていなかった画家の新たな面に光をあてます。

I 世界のひろがり 好奇心とノスタルジー

19世紀のフランスでは、外交や政治、思想や精神性、科学や技術の発達による交通手段の発展からも世界がひろがり、画家たちが描く世界も拡張されました。北アフリカの異文化を描いたドラクロワや文明化されていないタヒチを訪れたゴーガンの制作には、未知なる世界の風景や風俗への好奇心(キュリオシティ)が根底にあります。また、各地を旅して自然から受けた印象や感覚を描いたコローの作品は、都市化の進んだフランスでは美しい自然へのノスタルジー(郷愁)を表現したものと捉えられました。



ポール・ゴーガン《小屋の前の犬、タヒチ》1892年 ポーラ美術館蔵
タヒチ第一滞在期に描かれた作品。人々の暮らしの様子と強烈な光のもとで輝く自然の美しさを、総合主義の様式と原色で表現している。



北イタリアの景勝地ボロメ諸島の風景であるが、画家コローの個人的な想い出、記憶の風景を超えた、旅のノスタルジー(郷愁)を感じさせる。

ジャン＝バティスト＝カミュー・コロー
《ボロメ諸島の浴女たち》
1872年頃 ひろしま美術館蔵



中東への旅から帰国6年後の作品。モロッコのスルタンの近衛兵でフランス使節団の護衛隊長モハメド・ベン＝アブーが亡き人を想う姿を描いている。

ウジェーヌ・ドラクロワ
《墓地のアラブ人》1838年
ひろしま美術館蔵

II 都市への視線 パノラマとポートレート

産業革命の結果として誕生した都市の中でも、パリは「19世紀の首都」として、現代都市の原型となっていきました。その背景には1853年からのパリ大改造がありましたが、印象派の画家たちはこの変わりゆくパリを、しばしば俯瞰的視点で都市のパノラマとして描いています。また同じ時代に生きる人々も、彼らの重要な主題となりました。本セクションでは画家たちの描いた都市風景と、時代のポートレートとしての人物画を対比的に紹介し、広がる都市とその構成要素としての人々への画家の視線を探ります。



カミュー・ピサロ《ボン＝ヌフ》1902年 ひろしま美術館蔵

鋭い人間観察と時代の雰囲気伝える描写力

世紀末のモンマルトルに生きたロートレックは、カフェやキャバレーなどの賑わいを切り取って描くことに長けていた。この2作品も、個性あふれる酒場の人間を描いており、彼の観察眼の鋭さを感じることができる。



アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック
《アリスティド・ブリュアン》
1893年 ひろしま美術館蔵



アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック
《ムーラン・ド・ラ・ガレットにて》
1891年頃 ポーラ美術館蔵

III 風景のなかのかたち 空間と反映

ブーダン、シスレー、モネは水辺の風景を好んで描きました。水辺を描いた風景画は、伝統的に低い位置に水平線を置き、空の面積を多く取ることで空間の広がりをおぼわしてきました。しかしモネは、画面上部に水平線を置いた斬新な構図で描き、晩年には霧や霧の効果、水面の反映に関心を抱いて、形態と色彩が渾然一体となった二次元的な世界を創り出しました。本セクションでは水辺の風景に焦点を当て、画家の記憶に刻まれた風景の中のかたちを浮き彫りにします。



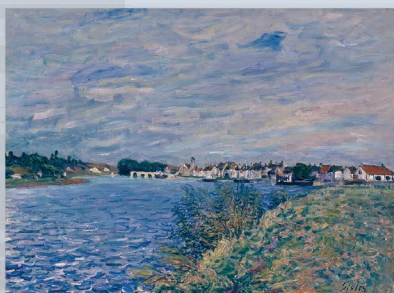
クロード・モネ《国会議事堂、バラ色のシンフォニー》1900年 ポーラ美術館蔵
国会議事堂が霧の中で蟹気楼のように浮かび上がっている。モネは冬のロンドンを訪れ、霧が創り出す複雑な光の効果を追究した。

シスレーが愛した水辺の風景

サン＝マメスはセーヌ河とロワン河の合流地点に位置する小村。シスレーは晩年、この地を中心に制作活動続けた。印象派らしい軽快な筆致で雲の動きや河岸の草むらを捉え、戸外制作で感じた自然の鼓動を伝えている。



アルフレッド・シスレー
《サン＝マメスのロワン河》
1885年 ポーラ美術館蔵



アルフレッド・シスレー
《サン＝マメス》
1885年 ひろしま美術館蔵

IV 風景をみたく光 色彩と詩情

19世紀後半、モネら印象派の画家たちが、それまでにない明るい色彩と素早い筆致によって目の前で刻々と移ろう光を記録しました。続いてスーラやシニャックら新印象派の画家たちは色彩理論を研究して点描技法を生み出し、光あふれる画面を描きます。こうしたあざやかな色彩と自由な筆致は、フォーヴィスムなど次世代の動向へとつながっていきました。画家たちが新しい表現を駆使して描いた、美しい風景とそれを照らし出す光の表情をご紹介します。



モネがジヴェルニーの庭に造成した睡蓮の池を描いている。池の水面には周囲の木々や空が映り込み、光を受けてきらめいている。

クロード・モネ
《睡蓮の池》
1899年 ポーラ美術館蔵
＊ポーラ美術館会場
[2019年3月23日-7月28日]のみの
展示となります。

印象派をアップデートした若き天才

当初伝統的な絵画を学んでいたスーラは、印象派展を訪れて衝撃を受け、新たな表現を模索した。《村はずれ》では、向きの異なる筆致を組み合わせ、簡潔ながら奥行きある空間をつくりだし、《グランカンの干潮》では、さまざまな色の小さな点を綿密に構成して光にみちた海景を描いている。



ジョルジュ・スーラ
《村はずれ》
1883年 ひろしま美術館蔵



ジョルジュ・スーラ《グランカンの干潮》1885年 ポーラ美術館蔵

V 記憶への旅 ゴッホ、セザンヌ、マティス

絵画には、画家が意図的に描いた形態や色彩だけでなく、筆跡や偶然的な傷跡などの痕跡にも「記憶」が残されています。そして、むしろそこにこそ作家の個性や制作へのこだわりがあらわれています。この章ではゴッホ、セザンヌ、マティスの作品を取り上げて詳細に観察し、さらに科学調査や文献調査、現地調査を加えることで、作品に込めた画家の想いとその「記憶」にせまります。

絵の裏面に隠された制作の秘密



フィンセント・ファン・ゴッホ《草むら》1889年 ポーラ美術館蔵

草むらという自然の細部を見つめる観察態度には、日本美術の影響が指摘されている。本作の裏面には、修復の必要性から、印象派の絵画に施されることが多いカンヴァスの裏打ちがなく、ゴッホの他の作品の絵具の付着やサインのような文字がみられる。これらは制作当時の状況を知る大きな手がかりとなる。

本展開催にあたり、東海大学特任講師・田口かおり氏の協力を得て、X線分析による絵具の成分の検証とゴッホの手紙に記された絵具の入手記録の比較や本作と同時期に描かれたヴィンタートゥール美術館（スイス）が所蔵する作品の実見調査を行った。現在、ゴッホ美術館の協力を得て、更なる調査を進めている。



《草むら》裏面



裏面に付着した絵具(拡大)

野花に宿る生命力を感じる、 最晩年に描かれた作品

ゴッホが亡くなる約1ヵ月前に、最期の地オーヴェール=シュル=オワーズの精神科医ガシェの家で描いた野花の静物画のうちの1点。



フィンセント・ファン・ゴッホ《アザミの花》1890年 ポーラ美術館蔵

消された黒猫？ 亡くなる2週間前に描かれた作品

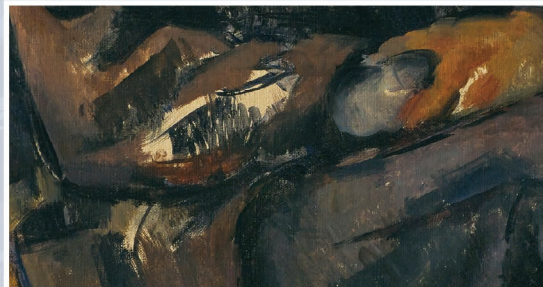
ファン・ゴッホの《ドービニーの庭》(1890年)は、ひろしま美術館のものと個人蔵のものが知られている。ほぼ同じ寸法で同じ構図だが、個人蔵の作品には黒猫が左下に描かれ、ひろしま作品には同じ場所にオレンジ色の加筆された跡が残されている。この部分について、元素の分布図を蛍光X線分析によって解析した結果、下に猫が描かれていたことがわかった。この加筆部分はゴッホの死後、修復を行った際に、ゴッホの周囲にいた画家によって施されたことも判明した。



フィンセント・ファン・ゴッホ《ドービニーの庭》1890年 ひろしま美術館蔵
*ひろしま美術館会場[2019年8月10日-10月27日]のみの展示となります。

塗り残しーセザンヌの技法の謎

セザンヌの作品には、様々な痕跡が残る。ここでは、彼自身の言葉や友人たちの証言、現地調査を踏まえて、この謎解きに挑む。セザンヌは、南仏エクスとパリ近郊とを行き来するなかで、コントラストによる強い色彩と中間色に支配された微妙に変化する色彩の違いに気づく。そして、究極の光の表現を「塗り残し」の中に見出したのであった。



ポール・セザンヌ《座る農夫》1897年頃 ひろしま美術館蔵

Cézanne

写真に残されたマティスの制作の秘密

このマティスの作品は、薄塗りで一見さっと仕上げた一気描きのように見えるが、画面全体をよく観察すると無数の傷跡が残っているのがわかる。この跡の正体が、彼の残した制作過程の写真から判明した。マティスは一気に描いたのではなく、一度描いた画面からその絵具を削りとは描き直すという作業を繰り返し、約3週間かけて現在の形を決めていった。そして、その写真と完成作を同時に展示して、自らの制作の秘密をあえて公開し、一気描きという公衆の評価を覆した。



アンリ・マティス《ラ・フランス》1939年 ひろしま美術館蔵



《ラ・フランス》 マーク画廊展示風景
Archives Documents: Archives Henri Matisse(D.R.)

Matisse